

「回復施設の現場から」

変わりゆく「依存」の中身

業界に求められる社会との共生



新型コロナウイルスの感染拡大など社会環境の変化によって、ギャンブルで問題を抱える人の傾向も変わってきている。ギャンブルで問題を抱える人の回復施設であるNPO法人ワンダーポート施設長の中村努さんと、浦和まはろ相談室代表で精神保健福祉士の高澤和彦さんに相談現場のいまを聞いた。

聞き手／野崎太祐（本誌）

コロナ禍で相談が増えた 公営競技への依存

——コロナ禍の2020年。ワンダーポートではどんな変化がありましたか？

中村 相談数も減ったし、新たな利用者も少なかったです。そういう意味では、とくにパチンコ・パチスロに関して依存の問題は深刻化していないと思います。一方で、オンラインのギャンブルに起因する相談が増えています。4月から12月までにワンダーポートで電話相談を受けた人の問題化の原因になった種目は、公営競技を含むものが3割にのぼっています。FXやゲーム課金もオンラインなので、コロナ禍で様相が変わっていると思います。

——公営競技は、ほぼオンラインだけでしか賭けられない状況が長く続きました。

中村 電話相談だけでは実態はわかりませんが、ワンダーポートに来てい

る人を見ると、ひとレースに大金を賭ける人もいれば、少額でも数多くのレースに賭ける人もいます。ポートルースなどは全国でものすごいレース数が行われていますからね。破滅的に賭けるタイプと、空いた時間があれば常に賭けていなくてはならないようなタイプに二極化している可能性があると思います。

——高澤さんが相談を受ける中で、2020年で特徴的だったことは？

高澤 同じですね。ネットを介したギャンブルの相談が増えています。以前はほぼパチンコ・パチスロ一色でしたが、割合がずいぶん変わってきました。一方で、先の見えない経済不安を反映しているような相談も増えました。傍目に見るときちんと仕事ができているような人たちが、これ以上の収入増や出世が見込めないからと、FXなどに副業的な感覚で手を出して問題化するようなケースも経験しています。

——政府の依存問題対策も小休止と

いった感じでしたね。

高澤 国から自治体レベルに降りてきていますよね。都道府県による基本計画の策定などはかなり動いている。ただ、指定を受けた相談拠点治療拠点などが依存問題の相談を受けていますが、解決につながらず、相談先を探して来られたというケースが結構ありました。

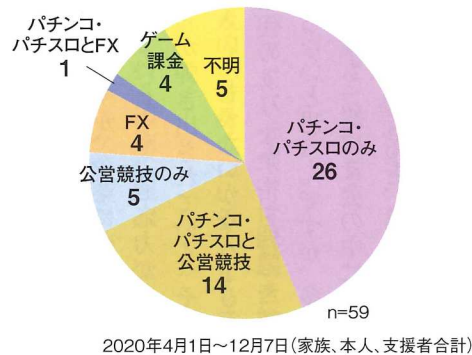
—— 公的機関は国からの指示で仕方なく対応しているという感じですか？

高澤 病気の回復というモデルだけでなく、ギャンブルの問題に関して見方が非常に狭くなっています。そういう研修しか受けていない人たちが対応せざるを得ない状況があると思います。中には、相談者の話から推測するに、どう考えても20年ぐらい前のアルコール依存の対応をそのままやっているのではとしか思えない対応もあります。

中村 そもそも国は、相談に行けば改善するという思い込みで動いている。でも、相談に行っても特効薬があるわけではない。結局、当たり前の家族の問題とか、人生の問題と捉えるしかないんです。10年くらい前までは明日食べるお金をどうするかみたいな相談があったんですが、最近では経済的に行き詰まって、仕事も辞めざるを得ない状況でといった切迫感のある相談はほ

んどありません。なんとなく長い期間かけているような問題が蓄積したというケースがほとんど。急性ではなく慢性疾患みたいな感じですね。急性であれば、相談を受けて、とりあえずこれだけはこうしましょうと処置ができませんが、慢性の人は、なんとなくアルバイトをやったり辞めたり、借金も破滅的ではないけどずっとやっていると

ワンダーポート
コロナ禍の電話相談件数(問題化種目別)



とりあえずすぐに動く必要がない相談が多いですよ。

—— 依存問題に関する世の中の関心も薄れているように感じますが。

中村 怖いのは、一旦制度化されてしまうと、予算がついてしまうので、依存問題に関する事業が形骸化したまま残るといこと。そこで起きてくる

のが、依存症をどんどん広げていくために、依存の問題を持つている人を「依存症」として扱うようなビジネスが広がることです。依存問題は引きこもりや発達障害などと同じ問題として考える必要があるんです。だから本当はトータルで考えないといけない問題です。例えば、パチンコホールが居場所になつている社会不適応な人がいるとしたら、その人の人生をどう考えるかにもパチンコ業界が目を向けてほしい。そうなる、依存問題対策という枠を超えて、社会の中でパチンコの役割を考えることが依存問題対策の着地点として見えてくるのではないのでしょうか。

高澤 パチンコが直接的な原因ではないのかもしれないけれども、不適応をおこしている方や高齢者など、あるいは、そもそもほどよく何ができない人たちがパチンコホールにアクセスしてきたり、そこが居場所になつていたりして、そこで問題を抱える可能性はあるわけです。原因じゃないから関係ないではなくて、そういう方々もお店を利用するひとりと考えて、対応をどうするかを考えてほしいと思います。

適応力の弱い人たちが 弾き出されていく

—— 最近のパチンコ・パチスロに関する

る相談に変化はありますか？

中村 相談件数減じたいが減っています。その中でも、朝からホールに並んで、仕事も行かないでパチンコをやっているという相談は本当にないですよ。逆に、オンラインのギャンブルに関しては増えている状況で、問題が出てきている途中だと思っています。ただ、ネット投票も上限を設ける流れになっていますよね。最近では、ゲーム課金の方がパチンコよりお金を使う人がいます。ゲーム課金は歯止めがない。しかもネットなので仕事でも仕事が終わった後も24時間できる。そういう意味では、パチンコは健康的ですよ。

高澤 結局、使える金額の上限が決まっているのは唯一パチンコだけ。ほかは上限がないので経済的な損失が短期間に大きくなりやすいですね。

—— ゲーム課金で借金問題を抱えるケースもありますか？

中村 2020年に相談を受けたケースではゲーム課金が4件ありますが、多分すべて借金があると思います。

高澤 本人の携帯料金が家族割のよなプランで、親に請求がいく。それでも携帯は必要だからと家族が延々と払い続けて被害金額が大きくなってしまふような相談は、しばしば経験します。例えば、家族割を外してひとまず被害を減らして、この人は本当に適切

変わりゆく「依存」の中身



なかむら・つとむ

國學院大學文学部文学科卒。10代からギャンブルにはまりはじめ20代で多重債務など様々な問題を引き起こす。29歳のときギャンブルをやめ32歳の2000年、ギャンブルの問題を抱えるワンダーポートを立ち上げる。リカバリーサポート・ネットワーク対面相談会担当も務める。

来てもらえるという方向に持っていかなくはないかという思いはあります。

—— 依存の問題も時代とともに変わりますね。
中村 それはそうですね。時代の変化に影響を受ける問題を「病氣」

にしてはいけないと思います。

にスマホを使える人なのかを見直すなど考えることがあるのに、一足飛びに病氣だ治療だになってしまふ。専門家に依存することで考えることを放棄してしまう傾向が強くなっている印象があります。

中村 普通に考えれば、家族内の問題。家族の中でちょっとした失敗があり、問題がある程度継続する。いまの社会は、そんななんとかなるような問題をことさらに取り立てて、依存症だからどこかに相談に行きましようとなってしまうっている。そちらの問題の方が大きいんじゃないかな。

—— ワンダーポートではギャンブル以外で問題を抱えた人も受け入れているんですか？

中村 いまは相談したいが少ないので、そういう人はいません。逆に、人生のリセットが必要な人など、こういう施設が合う人であれば、どんな人でも

高澤 コロナによって拍車がかかっていると思いますが、企業に余裕がなくなってきた中で、適応力が少し弱い人たちが弾き出されていく。そこが一番大きいんじゃないかな。1980〜90年代のような余裕を持った社会には戻らないと思うんですが、多少で足りない人でも一緒に社会の中にいられるようになってくると、こういう問題はまた様相を変えてくるんだと思います。

グレーな人たちの問題は 人生の問題や生活の問題

—— ワンダーポートではコロナ禍で、近所の荒廃地を耕して畑にして、野菜を作ったりしていましたね。

中村 自分も何かやらなくてはいいないと悩んでいるなかで出てきたアイデアです。部屋の中でミーティングを

やっているよりは前向きになれるのではないかと。でも野菜ができたらみんな喜んでいましたね。こうした活動は、どうせならギャンブルで問題を抱えた人たちだけではなく、障害者サービスを使うほどではないけれども、社会の中で居場所がないような人たちにも来てもらって、「一緒にできたらいいのでは」と思ったりしています。

—— 新しい方向性が見えましたか？

中村 どんな方向に行けばいいのかは、ずっと考えています。「依存症は病氣です」と勘違いして前向きにやってきた時の方が、何も考えなくていいので楽だったかもしれません(笑)。いまはいろんなものが見えてきてしまっている。依存問題に国や行政機関まで関わってくるようになってきた。その結果、どうも違うなあということも見えてきた。じゃあ自分たちの進むべき道とは何だろうと。社会の中で何かできないか。将来的には、一部で依存問題をやっていますという形になっているかもしれないですね。

高澤 中村さんの話は多分、障害福祉の制度みたいなものにガチつとはまる人でもなく、かといってパチンコをやめるとか、競馬をやめるといふことで生活できるようになるわけでもないという、その辺の人たちなんですよ。昔は、破滅的にパチンコをやっていた

人たちでも、パチンコをやめれば仕事がバリバリできるという人たちがいましたが、いまはそういう人はいないですね。

中村 昭和から平成のはじめごろにかけては、アルコール依存の問題でも、アルコールをやめれば社会参加できた人たちがたくさんいたんです。それがいま、アルコール依存でもそういう人がいなくなっている。少なくともAA(アルコール・アノニマス)やアルコール依存症の施設などでそういう話はあまり聞きません。それはギャンブル依存も同じで、ある意味、ギャンブルさえやめればどういかなるという人がほとんどいなくなってしまうんですよね。

—— 高度経済成長で社会がどんどん上向いていたときは、アクティブな人がいたということですね。

中村 ある意味、野心があつてすごく頑張っちゃう人。そこに疲れてアルコールに浸ってしまう。今の若い人にそういう人はいないんですよ。

高澤 欲とか何かを極めたいという部分が少ない印象がありますよね。障害とは言えないけど、本当にふわふわとした人たちをどうにかしなくてはいいけない。

中村 国はそのふわふわとした人たちに障害という名前をつけてどちらかにしたい。逆に障害を広げているんで

すよ。それでこの支援がありますよ、治療がありますよと、医療などがやっているんですが、実際、そうしたグレナードな人たちの問題は、人生の問題や生活の問題に入ってきている。行政機関や医療機関が解決できるものでもないのに、どうにかするのが行政機関の役割だとなってしまうんです。

——ゲーム依存もそうなりつつありませんか？

高澤 逆にゲーム依存症という話が出て来てから、ちよつと違いますかかという意見が出てきている。子どもをケアをする領域の人たちが、いわゆる依存症ベースの考え方に疑問を呈しています。

中村 人間的なお医者さんとか支援者さんはいます。そういう人たちの考え方が社会に広がるといいですよ。

高澤 会社や学校、家族の中で、人間としての居場所が狭まっている。その狭い中になんとか乗れというのが世の中の圧力なので、それに耐えきれない人たちが落ちていくのではないのでしょうか。

安心アドバイザーに期待したい 地域の医療福祉とのつながり

——パチンコに関して言えば、ホールに安心パチンコ・パチスロアドバイザ

ーがいるようになりました。どんな役割が期待できますか？

高澤 まだまだこれからだと思いますが、自己申告・家族申告プログラムとうまく組み合わせていけば一定の意味はあると思っています。例えば、使用金額の上限で声をかけるとか、困っているような人がいたらとりあえず話を聞いてRSNと連携するとか。精神保健福祉センターの人に話をする、「そんな仕組みがあるの？」「意外と良いかも」と言ってくくださる方もいらつしやいます。裏を返せば知らないわけですから発信も必要だと思います。

——安心アドバイザーは問題を抱えている人の一番身近にいる人たちですもんね。

高澤 ぼくらは比較的、パチンコ業界の方々とコミュニケーションがとれています。地域の保健福祉系の支援者の方々も安心アドバイザーと意見交換ができればいいですよ。お互いに見えている景色が違うので、依存の問題の支援に携わる人たちの勉強会には、そういう狙いもあります。

中村 さきほどの話ではないですが、社会の中でパチンコホールがどういう存在かといったことを、福祉施設とパチンコ業界が一緒に考えることが、これからのパチンコにとって必要になるのではないかな。もしかしたら、ワンデー

ーポートのような地域にあるNPOが、

社会でうまく居場所を見出せない人たちの問題について、パチンコホールさんとの意見交換することによって社会の問題を把握するとか。そういう方向性に依存問題は変わっていくんじゃないでしょうか。それはパチンコ業界にとっても良いことだし、ワンデーポートの仕事もそこでできるのかなと思います。

——お互いが地域の問題として捉えていくということですか？

中村 安心アドバイザーも、多分そういう役割が見えてくると思いますよ。パチンコホールに来る人だけを見ていたら、地域への広がりを持ってないと思うんです。そこで、安心アドバイザーが地域に目を向けて、地域の障害福祉サービスを担っている人と顔見知りになると、つながりできてくる。それは業界にとっても大切だし、それこそパチンコ業界に対する誤解や偏見のよう部分解消されていくような気がします。

——いまは安心アドバイザーというカタチをつくったばかりですが、そのシ



たかさわ・かずひこ

精神保健福祉士、浦和まほろ相談室代表。明治学院大学社会学部社会福祉学科卒。埼玉県庁に入り、県立精神医療センター等に勤務。2007年浦和まほろ相談室を開設。ワンデーポート家族個別相談担当、リカバリーサポートネットワーク対面相談担当、東京・埼玉・千葉の精神保健福祉センター等公的相談機関の助言者も務める。

ステムを活かして発展させるといことですね。

中村 安心アドバイザーの役割は、きつと依存問題だけじゃないですよ。そもそもパチンコ業界では、重度の知的障害や心身障害者への支援をしていますよね。そこがうまく地域と広がっていくといいですよ。

高澤 地域生活安心アドバイザーみたいなになれば、パチンコ業界と地域の保健福祉業界の双方で得をすると思います。外国の教会みたいな場があるといいですね。若い人から年寄りまでそれぞれの集い方で集える場所。そういう場所が日本にはないので、地域の居場所のひとつとしてパチンコホールをどう使うかをお互いが考える。そのなかで生活問題が発生した人をどういうふうに考えていくかですね。

中村 そのときに、依存の問題という捉え方をしない方がわかりやすいですよ。

AI